

計画9-3

霊長類の肝臓の比較解剖学的研究

シルバールトンの肝臓区分

中久喜正一（東京農工大）・江原昭善
（相山女学園大）

前年度、他の霊長類の肝臓とともに、1例のシルバールトン (*Presbytis cristatus*) の肝臓を調べたところ、他の霊長類の肝臓とは著しく概観を異にしていた。そのため今年度はさらに例数を増やして、種に特異なものかどうか検索を試みた。使用した材料は京都大学霊長類研究所所蔵のホルマリン固定の肝臓3例と、前年度作成した発泡スチロール溶液注入鑄型標本1例である。これらの肝葉の分岐をあらかじめ良く観察した後、中久喜・江原のアクリル樹脂溶液注入法により、門脈、肝静脈および胆管系の鑄型標本を作り、すでに明らかにしてきた20種類の霊長類の肝臓の門脈、肝静脈および胆管系の分布状態と比較検討した。シルバールトンの肝臓の外観は他の霊長類の肝臓と異なるが、門脈、肝静脈および胆管系の分布をみると、基本的には他の霊長類の肝臓と同じく、外側左葉、内側左葉、方形葉、内側右葉、外側右葉、乳頭葉および尾状葉の7葉からなる。これらのうち、外側左葉と内側左葉、方形葉と内側右葉はそれぞれ癒合して1葉になり、両者は臍静脈切痕によって隔てられる。内側右葉と外側右葉は臓側面の背側部を残して深い葉間切痕で隔てられる。またシルバールトンの後大静脈は、他の霊長類のものと異なり、門脈の肝臓への進入部の右側から進入して右上部に抜けるため、外側右葉の形態は他の霊長類のものと異なり、尾状葉も外側右葉の内側に位置すべく変形されている。これらの事実から、シルバールトンの肝葉の外観の特異性と、外部からの同定が困難であることが判明した。

計画9-4

類人猿の烏口腕筋の神経分布

川井 克司, 小泉 政啓, 児玉 公道 (熊本大・医・第一解剖)

ヒトの烏口腕筋は通常筋皮神経に貰われるが、約5%で貰われない場合がある。また烏口腕筋の支配神経は筋皮神経が貰く場合、腹側の筋束には筋皮神経から分岐するC5-6成分の神経(浅枝)が分布し、背側の筋束にはC7の腹側の神経束から分岐し、神経束の背側を走行する神経(深枝)が分布する。一方筋皮神経が貰かない例では浅枝が無いことが多く、このことから浅枝に支配された腹側の筋束が欠落することにより、筋皮神経は烏口腕筋を貰わなくなったと考えられている(小泉:1989)。以上の見解を比較解剖学的に検討する目的で、今回は類人猿の烏口腕筋と支配神経の分布様式を検索した。

Chimpanzee 4 例(4 体)、Gorilla 2 例(1 体)、Gibbon 4 例(4 体)を使用し、腕神経叢と筋を一体として取りだし、水浸下で実体顕微鏡を用い神経線維の神経上膜を除去して解析した。更に神経の筋内分布も調べた。

3種の類人猿の腕神経叢はいずれもC4あるいはC5からTh1までの根より構成され、上(C4・5・6)、中(C7)、下(C8・Th1)の神経幹と内側・外側・後の神経束が確認できた。烏口腕筋はすべて単一筋で、筋皮神経により貰われる種(Chimp.)と貰われない種(Gorilla, Gibbon)があった。

烏口腕筋枝は1)筋皮神経から分岐する枝(遠位枝)、2)外側神経束から分岐する枝(近位枝)の2系が存在し、更に起始・走行により①C7の腹側束から出て外側神経束の背側を通る枝(深枝)、②C(4)・5・6の外側神経束から分岐する枝(中間枝)、③C7の腹側神経束で胸筋神経基部あるいは腹側から分岐する枝(浅枝)の3種に区分された。近位枝の各枝は互いに交通する場合が多く、近位枝と遠位枝の間ではほとんど交通は見られなかった。類人猿の烏口腕筋枝は背腹の層序よりも、近位・遠位の分枝序列の方がより明瞭であることが判明した。ヒトでは両者が比較的明確である。